

若者たちへの伝言 2025



長野大学 PeaceEdu.
(戦争の記憶を継承し発信する学生グループ)
「信州上田学」2025 年度事業

はじめに

今年、太平洋戦争の終戦から80年を迎えました。この「若者たちへの伝言」は、戦争体験を直接語ることのできる方々が年々少なくなっていく中で、若者自身が聴き手となり、戦争を自分にも関わる問題として考え、次の世代へとつないでいくことを目的として続けてきました。2022年の初版刊行から数えて4冊目となります。

これまでは、太平洋戦争を生きの方々への聴き取りを軸に、「戦時下の日常」や「疎開」をテーマとして調査・記録を行ってきました。今年、大学生だけではなく、上田西高校 ECC 国際平和チームの生徒さんたちと共に平和プロジェクト上田（長野大学と上田西高の学生が、戦争体験者などへの聴き取り調査や若い世代への記憶の継承を目的に活動をしています）を立ち上げたり、小学生や中学生への講座を行ったりと、世代を越えた学びの広がりを大切にしながら活動してきました。

高校生・大学生が共に参加した戦争遺跡のフィールドワークでは、上田市内や周辺地域に残る戦争遺跡を実際に訪れ、そこに刻まれた痕跡や証言を手がかりに、「なぜこの場所が今も残っているのか」「自分たちの暮らす地域と戦争はどのようにつながっていたのか」を考えました。教科書や資料だけでは実感しにくい戦争の存在が、目の前の風景と結びつくことで、現在の生活ともつながっている出来事であるという認識を強める経験となりました。

小学生や中学生を対象とした平和講座・授業の実践では、戦争を直接知らない子どもたちに対して、どのような言葉や題材で伝えることができるのか、という難しさに向き合いながらも、写真や地域の遺跡、当時の生活に関するエピソードを通して、戦争は遠い昔の出来事ではないことを伝える試みを行っています。伝える側である若者自身が、問い直され、学び直す場ともなりました。

今年度の「若者たちへの伝言」には、英語の学習に力を入れている上田西高校 ECC 国際平和チームの生徒たちによる英文の特別寄稿を収録しました。世界に目を向ければ、現在もなお各地で戦争や武力衝突が続いています。このような社会だからこそ、自分の身近な地域に残る記憶に向き合い、世代や国境を越えて語り合う営みには、今を生きる私たちにとって大きな意味があると考えています。

本書に収めた記録や実践が、お読みいただく皆様にとって、戦争と平和を自分事として考えるきっかけとなり、次の行動や対話へとつながっていくことを願っています。

本書を刊行するにあたって、多くの皆様のご支援、ご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

目次

はじめに	01
目次	02
第1部 上田市内 戦争遺跡を巡るフィールドワーク	03
1 松脂の採集跡	04
2 仁古田飛行機部品製造地下工場跡	05
3 旧上田飛行場 半地下工場建設跡	06
4 旧上田飛行場	07
5 戦災記念の櫛	08
6 遊佐卯之助准尉の慰霊碑	09
今年度の活動紹介	10
第2部 特集	14
特別寄稿：高校生が発信する上田市のおもな戦争遺跡（上田西高等学校 ECC 国際平和チーム）	
Pine Trees with Scars in Higashiyama/ 傷ついた松の木	長須 結湖
Remains of the Underground Plane Parts Factory in Nikota, Ueda/ 仁古田飛行機部品製造地下工場跡	成沢 幸之助
The Semi-Underground Construction Factory/ 半地下工場建設	小山 礼夏
Former Ueda Airfield/ 旧上田飛行場	高野 咲桜
Burnt Zelkova Tree/ 燃えたケヤキの木	藤森 愛梨
Memorial Monument for Yusa's Family/ 遊佐卯之助准尉一家の慰霊碑	関 夏乃子
平和メッセージ（上田市戦没者追悼式スピーチ）	
2023年度 岡田 輝	22
2024年度 栗林 果穂	23
2025年度 小川 真央	25
第3部 活動を振り返って	27
戦争を知ることから、平和を担うことへ（4年 小川 真央）	28
私と戦争（3年 荒濱 遼太郎）	29
今回のこの活動を振り返って（1年 宇野 浩輝）	30
今回この活動を振り返って（1年 滝澤 龍之介）	31
編集後記	32

第1部

上田市内 戦争遺跡を巡る フィールドワーク

1 松脂の採集跡

東山の松林の中に、幹に矢羽根のような傷跡を残した松の木があります。遠くから見ると、どこにでもあるような松の木ですが、実はこの木こそが、今も生き続ける「戦争遺跡」です。なぜ松の木が戦争の証人となったのでしょうか。

戦争中、飛行機を動かすために欠かせなかったのが燃料です。当時の日本では石油をほとんど産出できず、戦前まではアメリカなどから輸入していました。しかし、太平洋戦争が始まり、日本はアメリカを敵に回したため、石油が手に入らなくなってしまいました。たのみの南方戦線での敗北により軍部は、石油の代わりとなる燃料を国内で確保しようと考えます。そのとき注目されたのが、松の木から採れる「松脂」でした。ドイツにおいては、松脂を飛行機の燃料に利用できるとした研究論文がありました。ドイツ駐在武官から報告を受けた軍部が採用を決定したのです。

こうして、軍部は全国の国民に松脂を集めるよう命じました。上田地域でも、松脂の採取が盛んに行われました。その証拠に、東山の下之郷だけでなく、丸子、真田、浦野、武

石などでも、矢羽根状の傷が刻まれた松の木が今も確認されています。

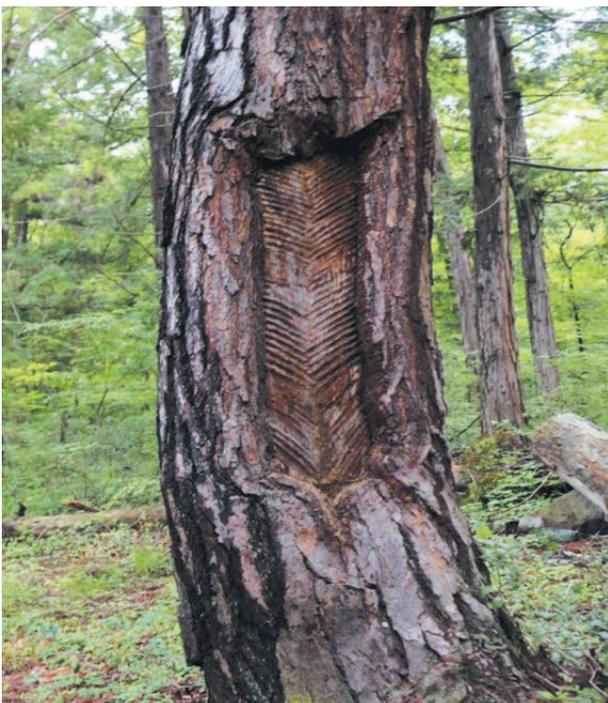
当時、下之郷では約100人の住民が「松脂採取組合」をつくり、朝早くから松林に入りました。一人ひとりが一斗缶とのかごを持ち、松の幹の下部にV字の傷をつけ、その下に缶を置いて松脂が流れ出るのを待ちます。1日で一斗缶がいっぱいになるほどの量が採れたといいます。木に傷をつける許可などは不要だったため、人々は繰り返し傷を刻み、できるだけ多くの松脂を集めようとしました。その結果、幹には矢羽根のような傷跡が幾重にも刻まれたのです。

しかし、苦勞して集めた松脂が、本当に飛行機の燃料になったのかというと、そうではありません。品質が悪く、戦闘機の燃料としては使いものにならなかったといわれています。代わりに、発電機や蒸気機関車の燃料として一部混ぜて使われた記録はありますが、目的だった航空燃料として使用された証拠は見つかっていません。

人間の手で深く傷つけられた松の木は、今もその痕を残しています。傷跡からは今なお松脂がにじみ出ており、木の皮が盛り上がって必死に傷をふさごうとしています。しかし、一度傷ついた木は弱りやすく、枯れてしまうものも多く、現在では数本しか残っていません。

もし戦争がなければ、東山には今も豊かな松林が広がっていたことでしょう。人々もまた、松を傷つけることなど決してなかったはずです。戦争は人の命だけでなく、自然の命までも奪うものであることを、これらの松の木は静かに語っています。

松の木は言葉を持ちません。しかし、幹の傷跡を見つめ、「なぜこのような形をしているのだろう」と考えれば、松が私たちに何を伝えようとしているのか、きっと感じ取れるはずです。皆さんもぜひ東山を訪れ、傷跡を残した松の木に触れ、“声なき声”に耳を傾けてみてください。



上田市東山

(文責4年 小川 真央)

2 仁古田飛行機部品製造地下工場跡

長野県上田市仁古田地区には、太平洋戦争末期に造られた「仁古田飛行機部品製造地下工場跡」があります。ここは飛行機を作ることを目的とした工場の建設が計画されていました。最初に、なぜ仁古田に工場を造ろうとしたのかを見てみましょう。

昭和19年(1944年)7月、日本が占領していたサイパン島がアメリカの手に渡ってしまいました。その結果、日本本土への攻撃が可能になりました。本土への空襲が激しくなっていく、当時、飛行機を造っていた三菱重工の名古屋工場も空襲に遭います。

三菱重工は日本軍にとってとても重要な軍需工場でした。軍需工場が次々と被害を受けるなかで、政府や軍は「工場を疎開させる」計画を全国で進めました。敵の爆撃から重要な施設を守るために、山の中や地中に工場を造るという大規模な計画です。その中でも仁古田は周囲を山に囲まれた地形であり、地下壕を掘るのに適した場所でした。また、都市部から離れているため、大規模な爆撃を受けにくいと考えられていたのです。旧上田飛行場を支える生産拠点として、昭和20年(1945年)6月からこの地下工場の建設が始まります。この工場建設計画は「ウ工事」とも呼ばれました。「ウ工事」とは上田地下倉庫工場の略した言い方です。上田地域は空襲の被害が少ないため安全に物資を保管できる場所として評価されました。敵国に発見されることを避けるため、地下に倉庫を作り、重要な設備や資材を守るための地下倉庫工事が進められました。

次に地下工場や倉庫の建設が進められる一方で、その工事を支えてくれたのは多くの働き手がありました。上田地域の住民や学生も労働を課せられました。体力的に厳しい作業に参加させられ、長時間労働を強いられたのです。また、朝鮮半島から連れてこられた朝鮮人を労働者として働かせた記録が残っています。朝鮮人労働者は小屋を建てて生活し、上半身



仁古田飛行機部品製造地下工場跡入口*



壕の中(現在、中には入ることはできません)*

裸で作業場に向かっていたそうです。この工事で労働に参加させられた人は約8,600人とされており朝鮮人は総勢約4,400人とされています。

これほど多くの人たちを集めて工事を進めてきましたが、3カ月足らずでこれらの地下工場は、計画通りに完成されないまま終戦を迎えました。現在、仁古田飛行機部品製造地下工場跡は、戦争の記憶を今に伝える貴重な戦跡となっています。戦時中に多くの人々が過酷な労働を強いられた事実や、戦争が地域の暮らしにどれほど大きな影響を与えたのかを知ることができます。

(文責1年 滝澤 龍之介)

*写真は上田市のHPから引用して掲載しています。

上田市の「戦争遺跡」のページは、右のQRコードからご覧いただけます。



3 旧上田飛行場 半地下工場建設跡

上田千曲高校から西に約1km、建物と駐車場の間にそのコンクリートはあります。このコンクリートこそが、軍用機が隠されるはずだった掩体ⁱ⁾を現代に伝える戦争遺跡です。

第二次世界大戦中、上田原から中之条にかけての帯には、陸軍の旧上田飛行場がありました。旧上田飛行場は、昭和6年(1931年)に市営民間飛行場として開場しましたが、昭和8年(1933年)には陸軍省に献納され、軍用機の飛行訓練場となりました。

太平洋戦争も末期となった昭和19年(1944年)7月、激戦の末、サイパン島の日本軍は玉砕し、島はアメリカ軍の手に落ちました。以後、サイパン島はアメリカ空軍のB-29大型戦略爆撃機による日本本土の本格的な爆撃の基地となりました。日本では、工業地帯を持つ地域を中心に、全国の主要な都市が空襲の被害に遭いました。その中でも名古屋市にあった三菱重工業の航空機工場は、同年12月の昭和東南海地震と、翌昭和20年(1945年)5月の名古屋大空襲で全滅に近い被害を受けてしまいました。

このため、旧日本陸軍は、来たる本土決戦に備えて、航空機の工場を空襲に耐えられる地下に移転させることを計画しました。その移転先は、松代町(現在の長野市)に建設中であった、戦時の最高統帥機関である大本営に近い、上田周辺に集結させることに決定しました。

上田が選ばれたのには5つの理由があります。1つ目は、上田は工場招致が熱心で、いくつかの工場が立地して生産をしていたからです。2つ目は、旧上田飛行場が近くにあったからです。3つ目は、丘陵が多くあるので、敵機の攻撃を受けにくかったからです。4つ目は、地質的に軟らかい土で工事がしやすかったからです。5つ目は、穀倉地である塩田平を控え、食糧の確保がしやすかったからです。

同年6月から、三菱重工業第五工場を中心に、仁古田・東塩田・川辺の3地区の丘陵



地に、エンジン部品組み立て、飛行機製造の半地下工場の建設を始めました。この頃は、8月30日までに完成させることが目指されていました。結果的には、8月15日の終戦の日よりも後に目標が設定されていたこととなります。

この地下航空機工場の建設工事は、公式には上田付近三菱重工業株式会社第五製作所分散防護工事と呼ばれていましたが、軍は秘密にするために、略して「ウ工事」と呼んでいました。工事には数百人の朝鮮人労働者と、日本軍の兵士が従事しました。工事の規模は、半地下工場が約5,000㎡(約1500坪)、その他附属工事(倉庫、事務所、宿舎)約23,000㎡(約7000坪)と広大な計画でした。

その中でも飛行機組み立て工場は、上田飛行場に隣接する川辺村の千曲川の河岸段丘面をえぐって半地下式の工場を造り、仁古田の工場からエンジンを、東塩田の工場から部品を運んで組み立てて、旧上田飛行場から飛ばす計画でした。河岸段丘に、飛行機を隠して格納する掩体を掘り進めて空襲に備えていましたが、工事着手後、間もなく終戦となり、そのままの状態軍は引き揚げてしまいました。

現在も残されているこの掩体のコンクリート基礎部分は、上田市内に残された戦争遺跡の1つとして、ここに工場が建てられるはずだったことを現代に伝えています。

(文責3年 荒濱 遼太郎)

i) 掩体^{えんたい}: 航空機などの軍用機を敵の空襲から守るために造られた巨大な格納庫

4 旧上田飛行場

現在、高校生が通っている上田千曲高校。その正門にある旧上田飛行場はどのように誕生したのでしょうか。

1920年代の上田市では、製糸業などの伝統産業が衰えはじめ、多くの市民が貧しい生活を送っていました。そこで上田市は、地域経済の新たな活路を模索するなかで、経済不況対策として周辺の土地を開墾しようとしたのです。しかし、千曲川の度重なる氾濫によって土地が荒れ、耕地としての再生が難しいとわかりました。そこで、地域の経済発展につながるよう新たな土地利用として、飛行場の建設が選ばれたのです。

上田市は東京都と新潟県の中継地点に位置し、交通の要所として発展が期待されました。上田市は国の融資を受け、市民と力を合わせて整備を進め、1931年に滑走路およそ600メートル、幅200メートルの「市営上田飛行場」を開場しました。これは全国で二番目に早く完成した市営飛行場であり、当時の上田の人々の夢と希望が込められた施設でした。当時の上田市は、飛行場を観光資源としてPRし、観光ガイドブックや絵はがきに掲載するなど、観光地の一つとしても売り込んでいました。

しかし開場から2年後の1933年、日本全体で軍事国家化の流れが強まり、陸軍は各地に訓練飛行場を求めるようになりました。上田市にも国から要請が届きました。同年、市営上田飛行場は陸軍省に献納され、「陸軍上田飛行場」と名前を変えました。そこでは主に若い飛行兵の初等訓練や軍用機の離着陸訓練が行われました。上田は盆地で平坦な扇状地が広がり、障害物が少なく、山が多かったことから、パイロットの山岳地帯での飛行訓練に適した地として高く評価されていました。

1937年になると日中戦争が勃発し、日本



「旧上田飛行場跡の碑」上田千曲高校グラウンド付近より

は戦争拡大に伴い航空戦力を充実させようと、全国各地に飛行兵養成のための施設を設けていきました。旧上田飛行場もその一つとして位置づけられ、「所沢陸軍飛行学校上田分教場」、のちに再編により「熊谷陸軍飛行学校上田分教場」へと改称されました。また、飛行場の拡張工事が行われ、新たな格納庫も建設されました。しかし、拡張工事を行う際、土地の買収や立ち退きが発生し、耕地や住宅を失う人たちがたくさんいました。生計に影響を受けた農家も多く、上田の人たちの生活環境は多く変化し、上田の人々を戦時体制の中へ巻き込むことになってしまいました。

さらに戦争が続くと日本はだんだん劣勢になっていきました。戦局を打開するため、軍は兵士の命を犠牲にして敵艦に体当たりする「特攻作戦」という戦術を考案し、各地で行われるようになりました。1945年には旧上田飛行場も特攻隊員を育成する飛行場として使われるようになりました。そして、旧上田飛行場から10名の隊員が特攻隊として出撃し、全員が戦死しました。この悲しい現実を前に、当時教官を務めていた遊佐卯之助准尉は終戦から3日後の8月18日未明一家で自決しています。

(文責1年 滝澤 龍之介)

5 戦災記念の^{けやき}櫟

上田東高等学校の正門近くに、大きく枝を広げる一本の櫟の木があります。実はこの櫟は、戦争の空襲をくぐり抜けて生き残った木であり、今も当時の記憶を伝える「戦災記念の櫟」として大切に残されています。

この櫟が戦火を体験したのは、1944年12月9日午後7時45分ごろのことでした。太平洋戦争の末期、アメリカ軍の飛行機が上田市に飛来し、当時の小県蚕業学校（現在の上田東高等学校）を爆撃しました。これが、長野県で最初の空襲といわれています。焼夷弾が校舎に落ち、たちまち炎が広がり、木造の建物は激しく燃え上がりました。

日本では、1942年4月18日に東京や横浜、名古屋などの大都市に初めての空襲が行われました。内陸の長野県は安全な場所と考えられており、空襲への備えが十分ではありませんでした。空襲を知らせる監視塔は、丸子方面から侵入してきた飛行機を敵機とは気づかず、空襲警報が遅れてしまったといわれています。警報が鳴ったとき、すでに校舎は炎に包まれていました。

この空襲で学校の校舎は全焼しましたが、不思議なことに、正門脇の櫟だけは焼けずに残りました。燃え盛る校舎のすぐそばで激しい熱を受けながらも、幹は黒く焦げた程度で、80年経った現在でも根を張り続けています。その生命力に、人々は深く心を動かされました。

戦後、この櫟は「戦災記念の櫟」として大



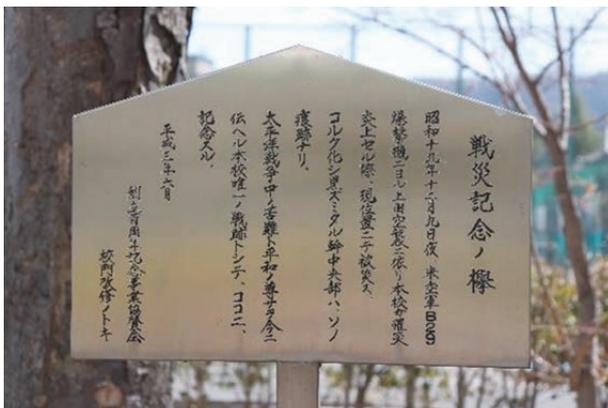
戦災の櫟

切に守られてきました。その姿は、戦火をくぐり抜けてなお堂々と立つ生き証人として、今も静かに語りかけてくるようです。櫟の力強い幹と広がる枝は、まるで「二度と戦争を繰り返してはならない」と訴えているかのようです。

この空襲では、焼夷弾の不発弾の爆発事故によって、近くにいた子どもたちの命が失われるという悲しい出来事もありました。直接の爆撃だけでなく、その後の事故までもが、人々に戦争の恐ろしさを痛感させたのです。人々はこの体験をきっかけに、防空壕をつくるなど、再び空襲に備える行動をとるようになりました。

なぜ小県蚕業学校が狙われたのか、今ははっきりとは分かっていません。アメリカ側の記録にはこの空襲の記載がなく、軍事施設である旧上田飛行場と誤認した可能性が指摘されています。

80年近く経った今も、「戦災記念の櫟」は変わらずそこに立ち続けています。静かに風にそよぐ枝葉は、あの日の炎と悲しみを乗り越えた証です。この櫟は、戦争の記憶を語り継ぐ生きた教材であり、地域の人々に平和の尊さを教えてくれる存在です。私たちはこの木を見上げながら、過去の出来事を忘れず、未来へと平和の思いをつないでいかなければなりません。



説明看板

(文責4年 小川 真央)

6 遊佐卯之助准尉の慰霊碑

終戦が日本国民に伝えられた3日後、1945年8月18日に痛ましい出来事が起こりました。上田市小県郡富士山村（現・上田市富士山）の猫山で熊谷陸軍飛行学校上田分教場の教官として特攻隊員の訓練を行っていた遊佐卯之助准尉（30）が自責の念から妻子とともに自決を遂げました。彼は生前から「君たちの命がなくなるときは私の命もない」と教え子たちに約束していました。妻の秀子さん（22）と娘の久子さん（生後27日）と家族三人で自決をすることとなりました。

私は8月18日に遊佐卯之助の慰霊の会に今回参加して、なぜ遊佐准尉とその一家が自決をすることになってしまったのか、遊佐准尉とはどのような人だったのかということをおぼることができました。

遊佐准尉は、熊谷陸軍飛行学校が上田市の旧上田飛行場に設けた上田教育隊で、終戦の日まで、他の教官とともに飛行兵の訓練指導をしていました。当時の日本軍の中では暴力的な指導が常でしたが、遊佐准尉は教え子に対して、決して手を上げず温かく接する優しい教官でした。そのため教え子たちからも信頼され、「優しく、人間味のある軍人」として慕われていました。彼は、教え子たちが特攻で次々と戦死する中で、自分だけが生き残ったことに強い責任を感じ、自決を決意しました。ここから私は、遊佐准尉が優しさで強い責任感を併せ持つ人物だと感じました。彼が時代の波に流されることなく、人間としての優しさと誠実さを貫いたことで、戦争の狂気の中で「人としてどう生きるか」ということを考えさせられました。

現在、猫山の東側斜面の自決現場には遊佐一家を慰霊する石碑と観音堂の慰霊碑が建てられています。やさしさと責任感にあふれた遊佐准尉の生き方と死は、戦争の悲惨さを語り継ぐ象徴として今も残されています。2023年には市民団体「特攻教官遊佐准尉並妻子慰霊の会」が発足し、同年8月18日に初の「慰霊の集い」では関係者50人が参列し、線香とともに不戦の誓いを新たにしました。

慰霊の集いは現在も続いており今年も私も参加させていただきました。式では長野詩吟明光会が遊佐准尉の辞世の句を吟詠しました。上田いずみ合唱団は「明日への伝言」「青い空は」「星のほほえみ」の3曲を歌い、平和への願いを込めました。また遊佐准尉の妻・秀子さんの甥である森田敏彦さんが「顕彰碑を建て、毎年盛大な慰霊の集いを開いてくださる皆さんに感謝しています。叔父たちは世界一幸せな仏です」と遺族を代表して述べていただきました。

この「慰霊の集い」は、遊佐一家の犠牲を通して戦争の悲惨さと平和の尊さを学び、語り継ぐ場として続けられています。私もこの今を生きるものとして、この悲劇を忘れず、平和の尊さを次世代に伝え、二度と同じ過ちを繰り返さないことを深く思っています。



慰霊碑



自決現場にたたずむ墓石

（文責1年 宇野 浩輝）

7 今年度の活動紹介

Peace Edu. は、2023 年度まで長野大学社会福祉学部の山浦ゼミに所属していたメンバーを中心に結成されたグループです。グループ名の「Peace Edu.」は、平和教育を意味します。

戦争体験者の高齢化が進む今日、戦争の記憶をどのように継承していくかが喫緊の課題となっています。

Peace Edu. は、太平洋戦争期の聞き取り調査を行うとともに、次世代を担う若者にどのように戦争の歴史を伝え、平和な社会の構築へとつなげていくかを考えてきました。

「知る」「語り継ぐ」「保存する」の3つの視点を持ちながら活動を行ってきました。

現在、学生4人がPeace Edu. に所属し、今年度は上田西高等学校（上田市下塩尻）と合同で活動し、高大連携による取り組みを進めてきました。

2025
8月6日

坂城町講座にて、平和について考える特別授業を実施しました。

坂城町の小学生を対象に開催しました。

Peace Edu. のメンバーが、上田市内の戦争遺跡について、小学生に向けて分かりやすく説明しました。

特別授業タイムスケジュール

午前：フィールドワーク

上田千曲高校（旧上田飛行場跡）

仁古田地下工場跡（飛行機部品製造地下工場）

遊佐准尉自決の地（猫山東端）

午後：グループワーク

太平洋戦争当時の体験者の証言から平和について考えよう



平和学習会の様子



小学生に向けて説明をする
Peace Edu. リーダーの小川真央さん

2025
8月9日

上田市内戦跡フィールドワーク

Peace Edu. と上田西高校が合同で、上田市内の戦争遺跡を訪問し、総勢 10 名ほどでフィールドワークを行いました。

高校生たちは、Peace Edu. のメンバーによる説明に熱心に耳を傾けながらメモを取り、下記の戦争遺跡を巡りました。

行程

- | | |
|------------------|-------------------|
| ①上田市下之郷（東山松脂採取痕） | ②仁古田飛行機部品製造地下工場跡 |
| ③旧上田飛行場 半地下工場建設跡 | ④旧上田飛行場跡（現上田千曲高校） |
| ⑤戦災のケヤキ（現上田東高校内） | |



仁古田飛行機部品製造地下工場跡



旧上田飛行場半地下工場建設跡

2025
8月18日

遊佐准尉慰霊の会に参加

終戦直後に自決した遊佐卯之助准尉と妻子の「慰霊の集い」が命日の18日、塩田の里交流館「とっこ館」で開催されました。
Peace Edu. と上田西高の学生が記憶の継承をテーマにこれまでの活動を報告しました。



上田西高の高校生と合同で報告しました



学生たちの報告に熱心に耳を傾ける参加者

2025
11月18日

上田市戦没者追悼式にて、平和メッセージをスピーチ

遺族や一般参列者、約100人余が参列するなか、Peace Edu. リーダーの小川真央さんがスピーチを行いました。
スピーチ原稿は、第2部からお読みいただけます。

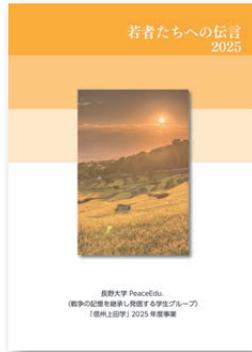


2025
11月
～
2026
1月

原稿執筆・活動まとめ

2026
1月末

成果物「若者たちへの伝言 2025」発行



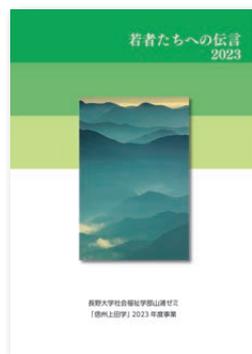
2026
2月16日

市内中学校で「語り継ぐ活動」を実施予定

◆これまでの刊行物



2022 年度発行
『若者たちへの伝言』



2023 年度発行
『若者たちへの伝言 2023』



2024 年度発行
『若者たちへの伝言 2024』



第2部

特集



特別寄稿

高校生が発信する 上田市のおもな戦争遺跡



上田西高等学校
ECC 国際平和チーム

長須 結湖 (1年)
成沢 幸之助 (3年)
小山 礼夏 (1年)
高野 咲桜 (1年)
藤森 愛梨 (1年)
関 夏乃子 (1年)

ECC顧問 山口 裕恵 先生 (英文校正)

Pine Trees with Scars in Higashiyama

長須 結湖 Yuko Nagasu

Despite being on the verge of losing the war, Japanese people—both young and old—continued to devote themselves to supporting their country. At the end of the Pacific War, Japan faced an increasingly desperate situation. The loss of the Southern Front cut off access to vital resources, and the United States' embargo left Japan severely short of fuel for airplanes. As a result, the government urgently searched for alternative fuel sources.

One idea was to extract resin from nearby pine trees. Ueda City, where the climate is relatively dry and well suited for red pine forests, produced the largest amount of pine resin in the prefecture. Local residents formed a group called the Yamanba Society to collect as much resin as possible. However, no test aircraft was ever able to take off using pine resin as fuel.

Special tools were used to cut into the trunks, leaving permanent scars. Today, these marks remain as a reminder of the extreme shortages Japan faced during the final stages of the war. Seeing these damaged trees made me feel sad because they show how even nature becomes a victim of human conflict. Their resin was taken in a desperate attempt to create substitute airplane fuel after Japan lost access to vital resources. Wars have devastating effects not only on people but also on the natural world. I strongly believe that such tragedies should never be repeated.

《英文対訳》傷ついた松の木

敗戦の瀬戸際にあったにもかかわらず、日本人は老若男女を問わず、国を支えるために尽力し続けました。太平洋戦争終結が近づくとつれ、日本はますます絶望的な状況に直面しました。南方戦線での敗北により重要な資源へのアクセ



スが断たれ、さらにアメリカの禁輸措置によって、航空機用燃料が深刻に不足しました。その結果、政府は緊急に代替燃料源を探す必要に迫られました。

その一つが、近くの松の木から樹脂を採取する方法でした。比較的乾燥しており、赤松林の生育に適した日照量の多いこの地域では、県内最大の生産量を誇っていました。地元住民は、できるだけ多くの樹脂を集めるために「やまんばの会」という団体を結成しました。しかし、松脂を燃料として使用した試験機は、離陸することができませんでした。

樹脂を採取するため、特殊な道具で松の幹に切り込みが入れられ、その跡は木に永久的な傷として残りました。これらの痕跡は、戦争末期に日本が直面した極度の物資不足を今に伝えています。傷ついた木々を見ると、自然でさえ人間の争いの犠牲になるのだということが示されており、深い悲しみを覚えました。日本は重要な資源を失った後、代替の航空機燃料を作るため、必死になって松の樹脂を採取しました。戦争は人々だけでなく、自然界にも壊滅的な影響を及ぼします。このような悲劇が二度と繰り返されてはならないと強く感じます。

Remains of the Underground Plane Parts Factory in Nikota, Ueda

成沢 幸之助 Konosuke Narusawa

In December 1944, the Mitsubishi Industries fifth plant in Nagoya was destroyed by air raids and the Tonankai earthquake. This caused the military to move their various facilities inland and set their sight to Nagano Prefecture. The army started creating their secret imperial headquarters in Matsushiro and an underground plane parts factory in Ueda City. Construction for the underground factory began in June 1945. The army had secret code names for these projects. The Matsushiro headquarters was called “Ma Construction”, while the code name for the underground factory was “U Construction.” Over 500 Japanese soldiers and 4,400 Korean people contributed to its construction. However, only 50~100 meters of the underground factory was built when the war ended a month and a half later.

This is a place that local Kawanishi Elementary School students always visit. When I was in elementary school, I learned that there were remains of a local battlefield nearby. Visiting this area again years later, I realized that war is not a distant time or place. My attitude towards learning from textbooks and the news has changed, and I am now able to see these historical sites as something that concerns me personally. It made me feel that if we young people cherish the attitude of spreading our message not only within Japan but also to the world, it would be a step towards a better future.

《英文対訳》仁古田飛行機部品製造地下工場跡

仁古田飛行機部品製造地下工場跡が設立された背景には、1944年12月に三菱工業名古屋第5工場が空襲と昭和東南海地震によって破壊された出来事があります。これを受けて、軍は各施設を内陸部へ移転する方針を取り、長野県に目を向けるようになりました。

軍は松代に極秘の大本営地下壕を建設すると



ともに、上田市では地下の航空機部品工場の建設を進めました。地下工場の建設は1945年6月に始まりました。これらの計画には秘密のコードネームが付けられており、松代の施設は「マ工事」、地下工場は「ウ工事」と呼ばれていました。

建設には500人以上の日本兵と、約4,400人の朝鮮人労働者が動員されました。しかし、戦争終結から約1か月半が経過した時点でも、地下工場はわずか50～100メートルほどしか完成していませんでした。

この場所は、地元の川西小学校の児童たちがよく訪れる場所です。私も小学生の頃、身近な場所に戦争の遺構が残されていることを知りました。

数年後に再びこの地域を訪れた際、戦争は決して遠い時代や遠い場所の出来事ではないのだと実感しました。それ以来、教科書やニュースに対する向き合い方も変わり、現在では、こうした歴史的遺跡を個人的な関心事として捉えるようになりました。

私たち若者が、日本国内だけでなく世界に向けても平和へのメッセージを発信していく姿勢を大切にすることが、より良い未来への一歩につながると感じています。

The Semi-Underground Construction Factory

小山 礼夏 Ayaka Koyama



This is the former site of the Ueda Semi-Underground Construction Factory. Mitsubishi's facilities in Nagoya City at the time made airplane parts and were destroyed by air raids. The air raids on Japan's mainland became more intense after the fall of Saipan in July 1944. So, the company decided to relocate to Ueda City. They also decided to open multiple factories rather than having one main location in case they were bombed. They were thinking of building a large-scale factory, but the construction stopped soon after because the war ended. Therefore, it never fulfilled its purpose.

We can still see today the location of where the army tried to hide the airplanes from bombers. The army made good use of the terrain and dug out areas in the airfield that used to be wide riverbanks to place the planes, which they then covered with special camouflage netting.

Today, parts of the original concrete foundation of the factory can be found in the city. They are reminders of the war. The damage caused by the air raids was immense, and I feel it truly demonstrates the suffering caused by the war. Now, the number of people who experienced the war is decreasing. I feel that it is important to know about these events to pass the knowledge

on to the next generation. Through these experiences, I learned that war is not just a thing of the past but is connected to our lives today.

《英文対訳》半地下工場跡地

ここは、かつて上田原半地下建設工場があった場所です。当時、名古屋市にあった三菱の工場では航空機部品が製造されていましたが、空襲によって破壊されました。1944年7月のサイパン陥落後、日本本土への空襲はさらに激化しました。そのため、会社は上田市への工場移転を決定しました。また、爆撃に備え、一つの大きな拠点に集中させるのではなく、複数の工場を分散して建設する方針も取られました。

当初は大規模な工場建設が計画されていましたが、戦争の終結により、建設はまもなく中止されました。その結果、この工場は本来の目的を果たすことはありませんでした。

現在でも、陸軍が爆撃機から航空機を隠そうとした場所を見ることができます。陸軍は地形を巧みに利用し、かつて広い川岸であった飛行場周辺の地面を掘り下げて航空機を配置し、その上に特別な迷彩網を張っていました。

現在、市内には当時のコンクリート基礎の一部が残されています。これらは戦争の記憶を今に伝える貴重な遺構です。空襲による被害は甚大であり、戦争が人々にもたらした苦しみを強く物語っていると感じます。戦争を実際に経験した人々の数は年々減少していますが、こうした出来事を知り、その記憶を次の世代へ伝えていくことは非常に重要です。

これらの歴史に触れることで、戦争は決して過去の出来事ではなく、現在の私たちの生活とも深く結びついているのだと学びました。

Former Ueda Airfield

高野 咲桜 Koharu Takano

《英文対訳》旧上田飛行場



The Great Depression of 1929 caused the Shōwa Depression in Japan. As a result, the number of unemployed people increased. The people of Ueda City also struggled because of the poor economy in 1931. To help support the community, the city decided to build an airport. It was later donated to the army in 1933. This donation took place after the Mukden Incident.

The Mukden Incident occurred when part of the Japanese-owned railway near Mukden, in northern China, was destroyed. The Japanese army used this as a reason to take control of Manchuria. The donation of the Ueda Airfield happened during this period—after the Mukden Incident and in the years leading up to World War II.

At Ueda Airfield, about 200 to 300 civilian and military aircraft were used. In 1945, it became a training base for Kamikaze pilots, and about ten fighter planes actually took off from the base for attacks. The second air raid on Ueda targeted this airfield on August 13, just two days before the war ended. This historic Ueda Airfield is located where Ueda Chikuma High School now stands.

I was very surprised to learn that there was an airfield in Ueda City during the war. Many civilians and military planes were used there, and it was also used for training Kamikaze pilots. People at that time lived as best as they could and did their best for Japan, even in difficult situations. When I learned about the history of Ueda Airfield, I felt the impact of how very important peace is today. I hope many people will learn about the history of this area.

1929年の世界恐慌は、日本に昭和恐慌を引き起こしました。その結果、失業者が増加し、上田市の人々も1931年頃の経済不況によって大きな苦勞を強いられました。地域社会を支えるため、市は飛行場を建設することを決定しました。この飛行場は、1933年に軍に献納されましたが、その献納は満州事変の後に行われたものです。

満州事変は、中国東北部の満州付近で、日本が権益を持っていた鉄道の一部が爆破されたことをきっかけに発生しました。日本軍はこの事件を口実として、満州の支配を拡大していきました。旧上田飛行場の献納も、満州事変後から第二次世界大戦へと向かう時代の流れの中で行われました。

旧上田飛行場では、約200～300機の民間機および軍用機が使用されていました。1945年には神風特別攻撃隊の訓練基地となり、実際に約10機の戦闘機がこの基地から出撃しました。上田への2回目の空襲は、戦争終結のわずか2日前である8月13日に、この飛行場を標的として行われました。

かつてこの歴史的な旧上田飛行場があった場所には、現在、上田千曲高等学校が建てられています。戦時中に上田市に飛行場が存在していたことを知り、私は非常に驚きました。そこでは多くの民間機や軍用機が使用され、神風特別攻撃隊の訓練にも用いられていたのです。

当時の人々は、非常に困難な状況の中でも、できる限りの努力を重ね、日本のために働こうとしていました。旧上田飛行場の歴史を学ぶことで、私は改めて、現在の平和の尊さを強く感じました。多くの人にこの地域の歴史を知ってもらいたいと思います。

Burnt Zelkova Tree

藤森 愛梨 Airi Fujimori

On the evening of December 9, 1944, Ueda City experienced its first air raid during World War II. The school, which was called Chiisagata Sericulture High School, now Ueda Higashi High School, was burned down. However, one large tree survived. Its trunk was burned by the fire. Historical research shows that an American soldier from Nagano deliberately dropped bombs on Tokida Pond near this school. This soldier cared about his hometown, so he dropped a bomb on the pond so as not to cause much damage.

Today, the school still keeps the burnt tree to remember the event. By visiting the school, students can learn how war can affect people. They can also learn the importance of peace. The burnt tree and the history of the school help us understand what people endured during the war. Ueda Higashi High School shows that history is not only found in books but it is also around us. It teaches young people to remember the past and to protect life.

The tree seems to represent both loss and hope. While it was scarred by fire, it survived, much like the community, which endured the devastating event. Having this piece of history right there at the school allows future generations to understand the deep impact of war that goes beyond the pages of textbooks. It is a reminder that history is not just about dates and facts, but about real lives and the ongoing need to work towards peace and understanding.

《英文対訳》燃えたケヤキの木

1944年12月9日の夜、上田市は第二次世界大戦中に初めて空襲を受けました。

小県養蚕高校（※現在の東上高等学校）は校舎が全焼しましたが、一本の大きな木だけが生き残



りました。しかし、その幹は火災によって大きく焼けたまわっていました。歴史的な調査によると、長野出身のアメリカ兵が祖国を思う気持ちから被害を減らすために故意にこの学校の近くの常田池に爆弾を投下したとされています。

現在も学校では、この出来事を忘れないために焼けた木を保管しています。学校を訪れることで、生徒たちは戦争が人々にどのような影響を与えるのかを学ぶことができます。そして、平和の大切さについて考える機会を得るのです。焼けた木と学校の歴史は、戦時中に人々がどのような苦難に耐えてきたのかを理解する手助けとなり、東上高等学校は、歴史が教科書の中だけでなく、私たちの身近な場所にも存在していることを示しています。それは若者に、過去を忘れず、命を守ることの重要性を教えてください。

この木は、喪失と希望の両方を象徴しているように感じられます。火災で深く傷つきながらも、壊滅的な出来事に耐え抜いた校舎と同じように生き残ったのです。この歴史の一部が学校に残されていることで、将来の世代は、教科書のページを超えた戦争の深い影響を理解することができます。また、歴史とは単なる日付や事実の集まりではなく、実際の人々の生活と結びつき、平和と相互理解に向けて努力し続けることの大切さを思い出させてくれるものなのです。

Memorial Monument for Yusa's Family

関 夏乃子 Kanoko Seki

Warrant Officer Unosuke Yusa was a teacher who taught young soldiers how to pilot planes throughout the war. He had a strong sense of responsibility and was very smart. He was a very kind person who never hit anyone. He often said to his students, "When you die, I will die too. Please entrust your life to me."

However, three days after the war ended, on August 18th, 1945, Yusa killed himself along with his wife and daughter at Nekoyama Mountain in Ueda City. This was because he decided to keep the promise he made to his students. His then recently born daughter Hisako lived only 27 days.

After that, the local people built a memorial monument for Yusa's family. Every year on August 18th, the local people gather at the Yusa family memorial monument and pray.

People can learn from this event that we must never have war again. We have to care about peace. I learned about Yusa Unosuke through this project. When I heard about it for the first time, I was very sad because he didn't have to die, but he killed himself because of his war experience. I think this event shows what war is. War is very cruel. In Japan 80 years ago, it was natural that people died. However, it is difficult for people living today to imagine the suffering and sadness that comes with wars. So, I won't forget that living in peace is not something to be taken for granted. And I am grateful for my life.

《英文対訳》遊佐卯之助准尉一家の慰霊碑

遊佐卯之助准尉は、戦時中に若い兵士たちに飛行機の操縦を教えていた教官でした。彼は責任感が強く、非常に聡明な人物でした。また、とても優しい人柄で、決して教え子たちを殴ることはありませんでした。彼はいつも生徒たちに、次のように語っ



ていました。「君たちが命を終えるときには、私の命もない。君たちの命を、私に預けてほしい。」

しかし終戦から3日後の1945年8月18日、遊佐准尉は妻と娘とともに、上田市の猫山で自決しました。これは、教え子たちとの約束を守るための決断だったとされています。生まれたばかりの娘・久子は、生後27日しか生きることができませんでした。

その後、地元の人々は遊佐准尉一家のために慰霊碑を建立しました。毎年8月18日になると、人々はその慰霊碑に集まり、静かに手を合わせます。この出来事は、戦争を二度と繰り返してはならないということ、私たちに強く考えさせるものです。私たちは、平和の大切さを忘れてはならないのです。

私はこのプロジェクトを通して遊佐准尉のことを知りました。初めて聞いた時とても心が苦しかったです。

本来であれば失われるはずのなかった命が、戦争によって追い詰められ、自ら命を絶ったという現実には戦争がどれだけ残酷なものかを表していると思いました。「戦争によって命が失われることが当たり前」になっていた80年前の状況は、今を生きる私たちにとっては想像もつかないことだと思いました。今自分達が平和で幸せな人生を送れていることが当たり前じゃないということを忘れずにいたい。そして自分の命があることに感謝したいです。

平和メッセージ

上田市戦没者追悼式において、長野大学 Peace Edu. 及びその前身の長野大学社会福祉学部山浦ゼミの生徒がスピーチする機会を、毎年いただいています。ここにこれまでのスピーチの内容を記したいと思います。

2023年

平和へのメッセージ

この度、上田市戦没者追悼式において、私がスピーチをさせていただけることを大変光栄に存じます。

私は、ここに立つにあたり改めて「平和とは何か。」について考えてみました。

先の大戦では、310万人を超えるたくさんの尊い命が失われました。

今を生きる私たちの「平和」や「自由」は、当たり前前の日常を享受できなかった方々の尊い犠牲の上に立っています。

自らの命を捧げた方々は、国のため、残された家族のために、その命を賭して戦争に立ち向かっていきました。戦争の中で、さまざまな葛藤や恐怖、苦しみを感じながらも勇敢に立ち向かいました。

残された私たちは、亡くなられた方々のお一人お一人の生きた証として、人生の物語や記憶を次世代に語り続けなければならないと考えます。そして、悲惨な戦争を二度と繰り返さないためにも、歴史を学び、事実を知り、真の平和を築く道を切り開き、歩み続けていかなければなりません。そのような思いから、本日ここに立たせていただきました。

現在、私は長野大学社会福祉学部ですべての人が誰一人取り残されることなく幸せを享受できる福祉の未来を学んでいます。併せて、社会科の教師を志望しているため、地域の歴史を深く学びたいと考え、専門ゼミでは、戦時下における日常をテーマに調査活動を行っています。戦時下の暮らしを体験された方々の想いを直接聴き取ることを通して、戦争とは何か。平和とは何かについて考えることが必要だと思っています。

戦時下を生き抜いてこられたお一人お一人の人生の歴史こそ生きた証として、記録し語り継いでいくことが必要だと思っています。しかしながら、このよう



な戦争の歴史の事実は語られることなく風化し、大きな歴史のうねりの中に吞み込まれようとしているのです。

私たちが聴き取りをしたある100歳になる高齢者の方は、「私は、自分の体験を話したいと思っていました。でも、誰も耳を傾けようとしません。今回若いあなた方が聴き取りに来てくれて本当にうれしく思っています。」また、ある方は「今の日本はとても心配です。だから、皆さんたちのような若い人たちがしっかり勉強して二度と戦争を繰り返さないようにお願いします。」と手を握って思いを託してくれました。語り手の皆さんの話す物語は決して忘れ去られてはいけないものだとは何度も何度も考えさせられました。

勇気、友情、愛、犠牲の物語は私たちの心に深く刻まれるべきだと考えます。そして、聴き取り調査を通して、学び、感じ、考えたことを自分にだけにとどめることなく、次世代に伝えていきたいと思っています。

戦争当時の記憶を私たちに伝えるものとして戦争遺跡があります。上田市内に残る戦争遺跡を実際に訪れ、その痕跡から当時の時代背景とそこに巻き込まれながら様々な自由を制限された当時のみなさんの日常を考えてきました。

私の出身は群馬県であり、上田市に住み始めてから4年の月日が経ちました。しかし、この活動を始めるまでは、上田にも戦争の被害があったことや戦争遺跡が身近にあること、戦争を体験した方々がこんなにも身近にいることを聞いたことすらありませんでした。これまで小学校、中学校、高校と戦争について学ぶ機会は多くありました。しかし、それも教科書で学ぶ表面上の大まかな出来事だけであり、誰もが戦争を自分事として捉えることができなかつたと思います。戦時下の暮らしについて、知れば知るほど、戦争というものを自分事として捉えることができるようになってきたと思います。

市内にのこる戦争遺跡の中から大変心を動かされたものを紹介します。

長野大学近くの上田市富士山に旧上田飛行場において特攻隊員の教官していた遊佐卯之助准尉ご家族の慰霊の塔があります。

遊佐卯之助准尉は終戦の33日後に妻子とともに自決をします。

なぜ終戦をしたにもかかわらず、平和な未来が待っているはずなのに妻子と共に自決をしなければならなかつたのか。

私は「責任と約束」であると考えました。

遊佐卯之助准尉は教え子である特攻隊員たちにある言葉を伝えていました。

「君たちの命を預けてくれ。」

「君たちの命が無くなる時は私の命もない、預かった命は自分の命に代えてでも教える。」と、この特攻教官としての責任と特攻隊員と交わした約束から凄惨な戦時下を生き延びたにもかかわらず、妻子と共に自決の道を選んだのです。

軍国主義の中では、珍しい優しさを持った遊佐卯之助准尉をも自決に追い込んだ戦時下の考えをもう一度繰り返すようなことがあっても良いのでしょうか。誰もが良いとは考えないはずです。

現代の私たちの生活は、戦争を身近に感じることができず、戦争とははるか昔の出来事と捉えがちです。

忘れるということは、すなわち、同じ過ちを繰り返

返してしまうということに繋がります。

このことから、戦争の事実を過去の出来事として捉えるだけでなく、自分事として捉え興味、関心を持つこと。そして、まず何より「知る」ことが最も大切だと考えました。

私と同世代の人間はもちろん、高校生や中学生、小学生などのより若い世代に対して、戦争について知り、平和とは何か、幸せとは何かを考えてほしいというメッセージを伝えていきたいと思っています。

聴き取り調査の中で、ある一人の女性の方に平和とは何ですかという問いかけをしました。するとその女性は「今。自由に好きなこと、やりたいことが思いっきりできること。」とおっしゃっていました。日本だけでなく世界に目を向けてみるとウクライナとロシアの戦争やアフガニスタンでの内戦、イスラエルとパレスチナの問題など今なお戦争は世界のどこかでは続いており、この瞬間にも誰かが戦地で命を落としているかもしれません。平和な世界の構築のためには平和主義を抱える日本が先頭に立って世界各国を引っ張っていく必要があると感じています。

今後、日本が、そして世界が戦争を起ささない、繰り返さないためには何が必要なのか。それはやはり私たち若い世代の活動や意識が重要になってくると思います。

戦争という悲劇を二度と繰り返さないためにも私たちが、平和を自ら育み、戦争、争いを避ける努力をしなければなりません。

将来、私は社会科の教員として教壇に立ちたいと思っています。教育を通じて、戦争の惨禍を後世に語り継ぎ若い世代に平和の大切さを伝え続けていきたいと思っています。

誰もが笑顔で当たり前の日常を享受できる平和な社会を築くために、ここに責任をもって平和のボタンをつないでいくことを約束いたします。

令和5年11月15日
長野大学社会福祉学部4年 岡田輝

2024年

平和へのメッセージ

この度は、上田市戦没者追悼式にお招きいただき、誠にありがとうございます。このような場でスピー

チの機会いただけること、幸甚に存じます。1945年に太平洋戦争の終戦を迎え、私たちの国は大きく変わりました。軍国主義により、国民の尊い命が失われたことを深く反省し、決して同じ惨禍を繰り返



返さないよう、日本国憲法において恒久平和の実現が掲げられたのです。

あれから月日は流れ、来年は戦後80年となる節目の年です。終戦時にこの世に誕生された方が80歳となり、実際に戦地に行かれた方や戦争を色濃く記憶されている方は、更に高齢となっています。戦争を本当の意味で知っている方と直接お会いし、お話をお聴きすることが困難になっていく中で、どうやって人々の心の中に戦争の歴史を残していくかということは、喫緊の課題であり、非常に重要なテーマではないでしょうか。

朝、目が覚めて学校に行き、友達と笑い合い、夜は温かい布団で安心して眠ることができる。そんな当たり前の日常が、かつては決して当たり前ではなかったこと。命の重みが軽んじられ、国のために命を捧げることを当然としてきた過去があったこと。それらを今一度振り返り、どのような犠牲の上に今日の平和が保たれるようになったのかについて、思いを馳せるべきだと考えます。本日は、そのような気持ちでここに立たせていただきました。

さて、少し視点を外に向けてみますと、昨今の世界情勢では、ロシアによるウクライナ侵攻やイスラエルとパレスチナの問題などが連日メディアで取り上げられています。これらの報道に関心を寄せ、動向を見守っている人も少なくないのではないのでしょうか。しかし、私たちの多くは、自国の平和のすぐ外側で、罪のない人々の命が踏みじられている現実を知っても、憤りこそ感じますが、それだけに終始しがちです。やはり、どこか他人事で、いつか自らも同じ境遇に陥るかもしれないとまで考慮するのは難しいのではないのでしょうか。とりわけ、私も含めて若い世代になるほどその傾向は顕著かもしれません。

というのも、戦争体験者と比較的年代が近い方は、親族内や近所、職場等の身近な所で、リアル

な戦争についての話を耳にすることがあったのではないのでしょうか。ところが、世代が進むにつれ、戦争体験者との交流の機会は希薄になり、戦争をはるか昔の遠い出来事のように感じやすくなるのです。若者にとって、日本が戦争をしていた時代があったことは、教科書の中にある歴史の1つとしては知っていても、自分とは関係の無いこととして切り離して考えがちです。日本が再び戦争を始める可能性を想像することは容易ではなく、世界の不穏な状況に対してもまるで対岸の火事のように捉えている人が少なくないはずです。もちろん、私もその1人でした。

そんな私でしたが、大学3年生の春に、上田市と太平洋戦争について研究していた山浦ゼミに入ることがきっかけで、戦争に対する見方・考え方に変化が生まれました。ゼミの活動を通して、上田市に残る戦争遺跡を実際に訪れたことで、身近な所にも戦争の痕跡がたくさんあることに気がついたのです。なかでも、ひときわ印象に残っているのは、松脂の採取跡です。長野大学のすぐ側にある東山に、矢羽根型の傷跡がついた松が数本残っています。それらは、戦時下の燃料不足を補うため、松の油で戦闘機を飛ばそうという計画の下につけられたものでした。切り刻まれた跡を塞ごうと木の皮が盛り上がっている姿が痛々しく、今もなお出続けている松脂を見ていると、人間によって理不尽に傷つけられた松の声なき声が聞こえてくるようでした。

戦争が奪うものは人の命だけではない、戦争は最大の自然破壊なのだ実感した瞬間でした。

また、戦争体験を持つ方へのヒアリング調査を進めていく過程では、いくつもの心揺さぶられるエピソードに出会いました。「正しい戦争はありえない」、これはインタビュー当時、93歳だった方がおっしゃられた言葉です。「例え、どんな理由があったにしても、戦争をすれば多くの人が傷つき悲しむことになる。勝っても負けても、犠牲になるのは国民であり、終戦後も一生消えない傷を両者が負うことになる。」と続けられました。人類が築いてきた科学の力を人殺しの道具に使う戦争は、本当に愚かなこと。力は、何のために使うのか、今一度考えなければいけないというメッセージを頂き、私の心に今でも深く刺さっています。

死が隣り合わせの時代を生き抜いた方のお話は、時に恐ろしく、時に生々しく、それでいて1つ1つの言葉に熱量がこもっています。ひとたび、自身の経験を話し出されると、どの方も年齢を感じさせないほどの、力強い言葉と真剣な眼差しで語ってくだ

さり、いかに自分の見てきたものを伝えたいと願っていたのかが分かりました。人生の先輩方が過ごした壮絶な青春時代について、生の声を通してきけるのは正に今だけです。私たちが直接語り継いでもらえる最後の世代だということを改めて意識し、自分たちは知るだけで終わらせず、次の世代に伝えていきたいという気持ちが芽生えました。そうした経緯で、去年は地域の小・中学校、高校へ赴き、学んだことを語り継ぐ活動もさせていただきました。子どもたちの前で授業をするという経験はありませんでしたが、戦争を少しでも自分事として感じてもらえることを目指して行いました。

今年度からは、大学の都合でゼミが閉講になりましたが、未来を担う若者が戦争について知ろうとしなければ、戦争の記憶は途絶えてしまいます。戦争に興味をもちにくい人が多い中で、自分たちまで悲惨な過去から目を背むけ、歴史を風化させて

しまえば、再び同じ過ちを繰り返すことに繋がってしまう。そのような思いから、平和教育を意味するPeace Edu. というサークルをたちあげ、人々の心に平和の灯りをともし活動が続けています。

私たちが、普段何気なく過ごしている日々の中には、戦争の歴史を後世へ伝えたいと願っている、「モノ」・「ヒト」が存在します。身の回りにある戦争の記憶と痕跡を受け継ぎ、この先へ繋げていくことは、未来を生きる私たち若者の責任です。これまで先輩方が築き上げてきた平和の礎を、今度は我々が守っていく番です。もう二度と、理不尽に笑顔と自由が奪われないよう、平穏な幸せを享受できる社会の実現に向けて、努力し続けることを誓います。

令和6年11月7日

長野大学社会福祉学部4年 栗林 果穂

2025年

平和へのメッセージ

この度、上田市戦没者追悼式において、若者代表として平和へのメッセージをスピーチさせていただけることを大変光栄に存じます。

私は、現在長野大学で戦争の記憶を語り継ぐサークル「Peace Edu.」に所属しています。サークルでは、太平洋戦争当時を生き抜いてこられた方々から戦時下の日常の生活体験を直接聞きとることや、上田市内に残る戦争遺跡のフィールドワークを行い、記録集「若者たちへの伝言」に残す活動しております。

今年は、戦後80年の節目の年になります。私たちの祖父母は、戦時下を体験していない方々が大半となってきました。したがって、家族の中で戦争中のことが話題に上ることもほとんどなくなっているのではないのでしょうか。私の家族でも同様でした。私にとっての戦争は、自分とはあまり関係のない「教科書のなかで学ぶ歴史上の出来事」という認識だったように思います。しかし、サークルの活動を行う中で認識が変わってきました。市内在住の戦時下を体験された方々から直接お話を聞くことで、当時の過酷な状況や悲惨さを、現実味をもって知ることができました。このような貴重な体験ができるのは、今しかないと思っています。その中でも、上田市にも空襲があり亡くなられた方がいることや終戦が過



ぎても苦しみ続けた人がいることは、今を生きる多くの人に知ってもらいたいと考えさせられるものでした。

1944年12月9日長野県初の空襲が上田にありました。当時の小県蚕業（現在の東上田東高校）の校舎がほとんど燃え落ちました。現在敷地内に残る「戦災記念の櫛」が当時の焼夷弾による爆撃の痕跡を残しています。翌日、焼夷弾の処理中に小学生3名がやけどを負って亡くなったこともショッキングな出来事でした。また、仁古田飛行機部品製造地下工場跡地で約4400人の朝鮮人の方が強制労働させられていた事実や旧上田飛行場の特攻隊員の教官をしていた遊佐卯之助准尉が1945年（昭和20年）8月18日に妻秀子さんや生後27日の久子さんともども自決した富士山地区の猫山にある自

決地に供養塔や慰霊碑が建てられていることを知りました。そして、旧上田飛行場跡地（現在の上田千曲高校）なども実際に訪れ、資料などから学ぶ中で、私たちが暮らす、この上田市も戦争の一舞台であり、こうした歴史の上で日々の生活が成り立っていることを実感してきました。

さらに、中学生に語り継ぐ活動では、真剣な眼差しで私たちの話を聞く生徒たちの姿を見て、若い世代が共に協力し合い、平和を繋いでいくことの大切さに気づかされました。いつの間にか、私にとって戦争が「教科書で学ぶ歴史上の出来事」から、今を生きる私たちにも繋がる出来事という認識に変わり、「もっと戦争について知りたい」、「伝えていきたい」と思うようになっていました。

そこで、今年、大学生活最後の夏休みを使って知覧特攻平和会館を訪れました。鹿児島県にある知覧は、旧上田飛行場で訓練を積んだ20歳前後の10数人を含む特攻隊員が、激戦地である沖縄へ出撃する前に過ごした最後の地です。知覧特攻平和会館には、特攻隊員の遺品や手紙が展示されていました。

特に、家族や恋人などの大切な人々に向けて綴られた手紙にあった

「あなたの幸せを希^{ねが}ふ以外に何物もない」

「私は飛び立ちます」

「さようなら」

などの言葉は、私の心に強い衝撃を残し、今でも頭の中に繰り返されることがあります。

私たちと同世代の特攻隊員の方々が、どのような思いでこれらの言葉を綴っていたのかを想像することしかできませんが、私は、悔しいと感じました。楽しいことをしたり、綺麗な景色を見たりすることができるはずだった方々が自ら死に向かっていかなければならない無念さは、言葉にできないものがあったと思います。展示室には、亡くなられた特攻隊員の写真もあったことから、手紙の内容をより身近に感じ自然と涙が溢れてきました。全ての手紙に目を通したい気持ちと、読むたびに苦しくなる心の葛藤がありながらも、閉館時間までゆっくりと見て回りました。平和会館を去った後、どのような理由があったとしても、命を奪い合うことに正しさは一つもないと痛感しました。

一方、中学生くらいの生徒たちが修学旅行で知覧特攻平和会館を訪れているのを見て、私ももっと早く訪れたかったと感じました。私は、高校生の時、

新型コロナウイルス感染症が蔓延していたことで、沖縄への修学旅行に行くことができませんでした。そのため、戦争の核心地、平和学習において重要な地での経験を伴う学びを受けることができませんでした。きっと、高校生の時に沖縄を訪れ、平和学習を十分に受けることができていたならば、戦争への理解や平和への活動に大学での時間をより多く費やすことができたと感じています。

しかし、私に残された大学生としての時間はわずかなものとなってしまいました。私は、来年度から教員として働くことが決まっています。現在の学校教育では、子どもたちの気持ちに働きかける教育が多く行われていると感じています。戦争の悲惨さや当時の人々の暮らしの大変さを知ることにより、「戦争はいけない」ことであるという気持ちを育むことができると考えています。これはとても大切なことです。しかし、それだけでは不十分だとも感じています。「戦争を起こさない、続けさせない社会を作る」ことが大切な世の中になってきているのです。世界では、現在もロシアによるウクライナ侵攻やパレスチナのガザへのイスラエルによる攻撃により多くの人々が過酷な生活を強いられ、多くの尊い命が奪われています。

平和な社会を作るためにはどうしたらよいのか、ということ子どもたちと考え、実際に行動できるようにするための教育を実践していきたいと思っています。戦争はいけない、という気持ちから、戦争を起こさない、という行動に移せるような子どもたちを育てていくためにも、これまでの活動でお聴きした貴重なお話や今に残る戦争遺跡を子どもたちに伝え続けていきます。平和のために行動することは、簡単なことではありませんが、微力ながら私も行動していきたいと思います。

大学時代にサークル活動を通じて、他の大学生よりも戦争や平和について考えた私、戦争体験者から直接お話を聞いた最後の世代としての私が、一人の教員として、また、一人の日本国民として、子どもたちに戦争の恐ろしさや戦争体験者の方々の思いを、責任をもって伝え続けていくことを誓います。

令和7年11月18日
長野大学 社会福祉学部4年 小川 真央

第3部

活動を振り返って



戦争を知ることから、平和を担うことへ

社会福祉学部 4年 小川 真央

今年は、戦後 80 年の節目の年です。この活動を始めまで、私にとって戦争は自分とあまり関係のない、教科書で学ぶ歴史上の出来事という認識をもっていました。しかし、市内で戦時下を生きの方々から直接お話を伺い、実際に戦争遺跡を訪れることで、私たちが暮らす上田市にも確かに戦争の痕跡が残されていることを知りました。

空襲によって傷ついた樺の木、地下工場跡、飛行場跡地など、普段何気なく目にしていた場所が、かつては命や暮らしが脅かされた戦争の一舞台であったことを実感しました。戦争は決して特別な限られた場所だけで起きたものではなく、人々の日常のすぐそばに存在していたのです。そうした学びを通して、戦争は過去の出来事ではなく、今を生きる私たちにも確かにつながる出来事なのだという認識へと変わっていきました。

そして、もっと戦争について知りたい、伝えていきたいと思うようになりました。

活動を通して、旧上田飛行場から飛び立った 10 数名の特攻隊員が、鹿児島県の知覧を経由して沖縄へ出撃したことを知りました。

そこで、私は今年の夏休みに知覧特攻平和会館を訪れました。館内には特攻隊員の遺品や手紙が展示されており、確かに生きていた人間の言葉にできないような苦しみや無念さを突きつけられました。家族や大切な人の幸せを願いながら、「さようなら」という言葉を残して飛び立っていった若者たちの存在は、私と同世代であるからこそ、より強く胸に迫るものがありました。そして、どのような理由があったとしても、命を奪い合うことに正しさは 1 つもないと痛感しました。

これらの経験を通して、戦争を知ることの意味が私の中で変わりました。ただ戦争の悲惨さを知り、「戦争はいけない」と感じるだけでなく、「戦争を起こさない、続けさせない社会」をどのようにつくっていくのかを考え、行動していくことの大切さに気づかされました。

これから私は、教員として子どもたちと向き合う立場になります。地域に残る戦争の記憶や人々の声を伝え、平和について共に考え、行動する力を育む教育を実践していきたいと考えています。戦後 80 年という今だからこそ、過去を学び、未来へとつなぐ役割を果たしていきたいと思えます。

私と戦争

社会福祉学部3年 荒濱 遼太郎

私は今年度から Peace Edu. の活動に参加しました。きっかけは、4年生の小川真央さんからのお誘いです。真央さんにお誘いいただいた時、私は昨年度に卒業された栗林果穂さんの模擬授業を思い出しました。

私が1年生の時に参加した果穂さんの授業は、中学校社会科歴史的分野の授業で、特攻隊が教材として取り上げられていました。その授業では、特攻隊員たちの遺書を読むという学習活動がありました。

家族に宛てた手紙に「決戦に参加できることを、深く喜んでおります」や「喜んで大空に散っていきます」など、母親に宛てた手紙に「母さんに死なれたくないから行くのです」や「私が戦死したからといってどうか悲しまないで」などと記されているのを読むと、涙が出そうになりました。

戦争に行き行って亡くなることを喜びと感ずること、自分の大切な人を亡くさないために誰かの大切な人を殺めて自らも亡くなろうとすること、自分が亡くなっても悲しまないでほしいと言うこと、そして彼らにそのような遺書を書かせた社会というもの。これらに対する悲しみや怖さが涙になるのだと思います。このような戦争の悲惨さが伝わる教材を用いて、戦争や平和についての教育をしていくことの大切さを感じた授業でした。

この授業への先生方のご講評で知ったのが、Peace Edu. の活動の前身であり、果穂さんも所属されていた山浦先生のゼミの活動です。

果穂さんの授業に感銘を受けたこともあり、私は真央さんからのお誘いを受けました。私自身、先の戦争に関する知識は多くはありません。ただ、知っていることの1つは私に大きく関わることだと思っています。

それは母方の祖父のことです。祖父は終戦の年に徴兵が始まる学年だったのですが、早生まれだったので徴兵される前に終戦を迎えました。もし祖父が徴兵されて戦死していたら、祖母は祖父とは結婚せず、母も私も存在しなかったでしょう。そんなことを考えると、先の戦争も私たちに大きく関わっていると言えます。

現代に生きる人々は、自分が先の戦争と関わっていると思って生活してはいないでしょう。しかし、上田市の戦争遺跡のフィールドワークで学んだように、上田には3度の空襲で亡くなられた方々も、旧上田飛行場から特攻で飛び立って亡くなられた方々もいらっしゃいます。今年度の上田市戦没者追悼式では市遺族会の会長さんが「我々遺族は1日たりとも面影を忘れたことはありません」と戦没者に語りかけられました。遺族の皆さんにとって戦争はまだ終わっていないのです。戦没者遺族だけではありません。戦時下を生き延びた方々がいらっしゃったからこそ、私たちはこの世に生を受けたのです。その事実を知ること、それこそが平和への第一歩なのだと思います。そして、事実を知ることが助けるのが教育であると信じています。これからの社会を創っていく人たちが、愛する人のために生きていける平和な社会を創っていけるように、来年度以降も活動していきます。

今回のこの活動を振り返って

社会福祉学部 1年 宇野 浩輝

私は今年度からこのような活動に初めて参加させていただいたのですが戦争に対する知識などは一切持っていない状態でした。そんな中、この活動を通して様々なことを学び、戦争に対する考え方が私の中で少しずつ変化していくのがわかりました。

活動の中で特に印象に残っているのは、遊佐卯之助准尉の慰霊の会です。これまで私は、戦争で亡くなった人々の存在を歴史の中の数字や出来事でしか捉えていませんでした。しかし、慰霊の会に参加し、遊佐卯之助准尉という一人の人物の生涯や思いについてお話を伺うことで、戦争が確かに「一人一人の命」を奪っていった現実を強く感じました。また、慰霊の会が長年続けられていることから、戦争の記憶を語り継ごうとする人々の思いと重さを知りました。戦争体験者が少なくなる中で、過去を忘れず、平和の大切さを次の世代へ伝えていくことの重要性を改めて考えさせられました。

また、フィールドワークなどを通して、戦争を体験した人々の思いや苦しみを知ることができました。戦争が身近な地域に影響を与えていると知らずに今までは生活していたのですが、身近な地域に残る飛行場や、地下工場跡地を目にしたことで、戦争が決して特別な場所で起こったものではなく、私たちの生活のすぐそばに存在していたものであると実感しました。実際にその場所に立ち、当時の状況や人々の暮らしについて説明を受けることで、戦争が人々の日常をどれほど大きく変えてしまったのか想像できました。

この活動を通して、戦争について「知っているつもり」になっていただけで、実際にはなにも理解できていなかった自分にも気づかされました。そして「戦争を繰り返してはならない」という言葉の意味を自分自身の問題として考えることの大切さを学びました。過去の出来事に目を向け、そこから何を学び、今を生きる私たちがどのように行動していくのかを考えることで重要なのだと思いました。

今回の活動を振り返りとしては、視野を広く持ち、本物に触れることの大切さを強く感じました。今後も、戦争について自分なりに学び続け、得た学びを周囲に伝えていきたいと思います。そして、この活動で得た経験を無駄にすることなく、平和について考え続ける姿勢を大切にしていきたいと思います。

今回この活動を振り返って

社会福祉学部1年 滝澤 龍之介

この活動を通して戦争は自分事として捉えていかなければならないと感じました。私の祖父から疎開の話など戦争について話を聞いていましたが、身近なものとしては感じられていませんでした。

しかし、活動に参加して上田市にも戦争のあとが多くあることに驚きました。私は上田出身で上田出身者であっても知らないところが多くあり、学びなおしていかなければならないと感じました。遊佐卯之助准尉慰霊の会に参加させていただいたときは戦争の悲惨さ、命の尊さを改めて考えていかなければならないと感じました。当時の日本には「死ぬことが美徳である」という価値観があり、「部下と同じように自分も死ぬべきだ」という考えが、遊佐一家の自決という悲しい結末につながった一因であったのではないかと感じました。

戦争によって多くの尊い命が失われてきた歴史を振り返ると、現在の平和がいかに貴重なものであるかを、あらためて実感しました。

教科書には代表的な出来事のみが掲載されており、自分たちの地域で起きた戦争についてはほとんど触れられていません。そのため、「このままの学び方でよいのだろうか」と疑問を感じました。学校教育の中で戦争に関心を持つ生徒が多いことを踏まえると、全国的な歴史的出来事を学ぶことはもちろん重要ですが、地元の戦争の歴史を知ること、当時の人々の生活がどれほど厳しかったのか、そして戦争の現実をより身近な問題として捉えることができると思います。

例えば、戦争遺跡の一つである「傷ついた松の木」は、戦時中の燃料不足を背景に、飛行機の燃料として松脂を採取するため、意図的に傷をつけられたものです。この事実から、戦争は人々の生活だけでなく、自然環境にも大きな影響を及ぼしていたことが分かります。

さらに現在、戦争を語り継いでいく方が少なくなっていることを受けて今の若者が戦争について考え直していかなければならないと思います。世界を見てみると紛争が絶えず、紛争が原因で悲惨な出来事がたくさん起きています。これらの状況を踏まえると、一人一人が「戦争はどういったものであったのか」を知り、考えていく。そして、それを伝えていくことが非常に大事になるのではないかと思います。また、私たち一人一人が平和について考え、日常の中で「当たり前」を見直していくことが、戦争を繰り返さないための第一歩になるのではないかと思います。

今回の活動に参加していなければ、きっと一生知ることのなかった事実だと思います。上田地域に残された戦争遺跡を実際に見て歩く中で、戦争の影響が決して遠い過去や他の地域の出来事ではないことを実感しました。あらためて、地元の戦争の歴史を学び、理解することの大切さを強く感じました。

今後、私は地域に残る戦争遺跡や資料をさらに調べたり、実際に体験談を聞いたりする機会を大切にしていきたいです。そこで自分は何を感じたのか、何を学んだのかを後世に伝える活動を続けていきたいと思っています。私はまだ1年生であるのでこの活動を引き続き続けて戦争を語り継ぐことに力を注いでいきたいと思っています。

《 編集後記 》

今年は、戦後80年という節目の年でした。戦争を体験された方々が高齢となり、家族の中で戦争のことが話題に上ることもほとんどなくなっているのではないのでしょうか。

こうした中で、どのように戦争を後の世代に伝えていくかが非常に重要な課題とされています。

世界に目を向けると、ロシアによるウクライナ侵攻やパレスチナのガザへのイスラエルによる攻撃により、多くの人々が過酷な生活を強いられ、尊い命が奪われています。しかし、メディアから情報を得るだけでは、こうした出来事を自分事として捉えることは難しいと思います。

特に若者にとって、戦争は教科書にある歴史上の出来事であり、自分とはあまり関係がない、と感じることが多いのではないのでしょうか。しかし、私たちは活動を通して、このような歴史があったからこそ、今の生活が成り立っているだと実感してきました。平和が大事、戦争はいけない、と感覚では分かっているけど、戦争のことが忘れ去られてしまうと、再び同じ過ちが繰り返されるのではないかと考えます。そのため、戦争を知らない若い世代の人々が、共に協力し合い、過去の事実から現在の社会を見つめていく必要があると考えます。

これから生きる全ての人々が、平和な日常を送ることができるような社会の実現を願い、「若者たちへの伝言2025」を作成しました。多くの方にお手にとっていただき、戦争について今一度考えていただけたらと思います。

最後になりましたが、本書の刊行にお力添えいただきました方々には、多大なるご支援をいただきました。ここにスタッフ一同、心より御礼申し上げます。

2025年12月

長野大学 Peace Edu. (戦争の記憶を継承し発信する学生グループ)

○小川 真央	社会福祉学部	4年
荒濱 遼太郎	同	3年
宇野 浩輝	同	1年
滝澤 龍之介	同	1年

監修 現高等専修学校信州クラーク高等学院副校長 (前長野大学副学長)

山浦和彦 (Peace Edu. アドバイザー)

- 記録集作成 | 長野大学地域づくり総合センター「信州上田学」2025年度事業
「若者たちへの伝言」プロジェクト
- 監修 | 現高等専修学校信州クラーク高等学院副校長（前長野大学副学長）
山浦和彦（平和プロジェクト上田代表、PeaceEdu. アドバイザー）
- 取材 | PeaceEdu.（戦争の記憶を継承し発信する学生グループ）
- 協力 | 上田西高等学校 ECC 国際平和チーム
上田市遺族会、遊佐准尉慰霊の会
- 発行 | 2026年1月



長野大学 HP 信州上田学サイト